令和６年７月１日（毎月１回１日）発行　　昭和 43 年１月 10 日第３種郵便物認可

みちしるべ

MICHISHIRUBE

みちしるべ

Issue of July 2024
MICHISHIRUBE No.908

Contents

雑草を抜きながら／四谷　証 3

詐　欺／三浦真樹 4

あなたはひとりぼっちではない／アレックス・サミュエル 6

みちしるべアーカイブ
清少納言が描いた光／小林　実 7

著名人と聖書
第 13 回　レフ・トルストイ／古賀敬太 12

☆当月号および過去 1 年分のみちしるべを、電子書籍版にてご覧頂けます。　https://e-michishirube.com

表紙写真：鳥海山麓からの庄内平野夜景（山形県酒田市）

雑草を抜きながら

四谷　証（あきら）

私が住んでいる家には、後ろに小さな庭があります。雨がたくさん降ると、雑草もたくさん生えてきます。どれだけきれいにしても、種や根が残っていればまた生えてきます。

雑草を抜きながら、人間の罪について考えます。人の心には悪い思いが出てきます。次から次へと出てきます。ちょうど私たちの心の中に、罪の種や根があるようです。悪いことを考えないように、悪いことをしないようにどれだけ気をつけても、罪の種や根を取り除かない限り、罪がいつも芽生えてくるのです。

雑草を抜きながら、神様の優しさについて考えます。よく見ると雑草にも花が咲いています。お店で売られる花も、雑草として抜かれる花も、どちらもよくできていて、きれいです。それはどちらも神様が造り、世話をしてくださっているからです。雑草という名の草はありません。

雑草を抜きながら、神様の救いについて考えます。抜いて捨てられてしまう雑草でさえ世話をしてくださる神様は、私たちのことをそれ以上に大切にしてくださいます。

私たちは自分中心で、正しく生きることもできず、神様にとって何の役にも立ちません。しかし、そのような私たちを、神様は捨てることなく大切にしてくださり、私たちから罪を完全に取り除いて、救いを与えてくださるのです。

「今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草さえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたには、どんなに良くしてくださることでしょう。信仰の薄い人たちよ。」（ルカの福音書12章28節）

詐欺

三浦真樹

近年、詐欺事件が絶えません。その方法も昔とだいぶ変わり、犯人を捕まえるのも大変になっていると言います。私の職場の上司も「息子さんが強盗容疑で逮捕されました。保釈するにはお金が必要です。本日中に以下の口座までお金を振り込んでください。」という内容の警察を名乗るメールが届いたそうです。上司は驚いたけれども、さすがにおかしいと思い振り込むことはしなかったそうですが、詐欺事件を身近に感じたと言っていました。

私にも公共料金や配達関連の詐欺メールが以前より多く届くようになった気がします。過去に一度、実際にインターネットで商品を購入し、配達が来るのを待っていたとき「配達しましたが不在でした。以下のＵＲＬをクリックしてご確認ください。」という内容のメールが届いたことがありました。注文していた商品が早く必要だったので、焦ってそのメールの指示通りに行ってしまったことがあります。結果的にメールが詐欺であると途中で気づき、大事には至りませんでしたが、途中まで信じていた自分が怖くなったことがあります。このように詐欺

グループは人間の心理状態を利用して犯行に及ぶそうです。私自身もそのときは「早く商品を手に入れなくては」という頭になっていて、周りのことが全く見えていなかったのです。

これだけ世間で騒がれ、ニュースでも騙されないように呼び掛けているにもかかわらず、被害がなくならないのはなぜでしょうか。そこには「自分は大丈夫、失敗しない」という考えが存在しているからではないでしょうか。そしてその考えこそが一番危険であるということに気付かされます。

「人が見て自ら正しいとする道でも、その終わりはついに死に至る道となるものがある。」

（箴言14章12節 ※口語訳）

私たちは人生の分岐点に立たされたとき、常に正しいと思う道を選択して人生を歩んできたと思います。しかし振り返るとそれは本当に正しかったのかと疑問を持つこともあるのではないでしょうか。大変厳粛なことですが聖書は正しいと思える道も最後は死に至ると教えています。私たちは何をもって自分の道を正すことができるでしょうか。聖書は解決の道を教えています。

「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」（詩篇37篇5節）

聖書は主（イエス・キリスト）を信じ、人生である道をゆだねよと言っています。また

「この方に信頼する者は、だれも失望させられることがない。」ローマ人への手紙10章11節）とも言われています。

この世の中は詐欺のような不正や裏切りといったもので満ち溢れています。私たちは確実に正しい道を歩んでいけるでしょうか。「自分は大丈夫、失敗しない」と周りが見えなくなっていることはないでしょうか。聖書は主であるイエス・キリストを信じ救われた人生は失望に終わることがないと教えています。ぜひ、正しい道であるイエス・キリストを信じ、ご自分の人生をゆだねられたら幸いです。

あなたは ひとりぼっちではない

You Are Not Alone

アレックス・サミュエル

皆さんは多くの人に囲まれながらも孤立感を感じることはありませんか。それは、人間が本質的に「つながり」を求めるように造られているからです。特にコロナ禍では、「つながり」の重要性を実感する機会が増えたのではないでしょうか。

しかし、人と人との「つながり」には必ず限界があります。他の人が完全にあなたを理解することはできないためです。そんな状況下では、いくら人々との「つながり」を求めても、孤立感が生じるのは不思議なことではありません。

しかし、あなたは決してひとりぼっちではありません。聖書は、私たちを創造された神様がおられ、私たちを完全に理解し、私たちとの「つながり」を求めていることを次のように証ししています。

「主（神）よ　あなたは私を探り　知っておられます。あなたは　私の座るのも立つのも知っておられ　遠くから私の思いを読み取られます。あなたは私が歩くのも伏すのも見守り　私の道のすべてを知り抜いておられます。」（詩篇 139 篇 1 ～ 3 節）

私たちの日常の苦労や見えない痛みの中でも神様は私たちを理解し「つながり」の手を差し伸べています。そして、神様はどんな状況でも決して私たちの手を離さない完全な関係を築きたいと願っています。皆さんはそのことをご存じでしょうか。

「主（神）があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。」

（申命記 31 章 8 節）

神様は私たちの涙や悲しみに寄り添い、私たちの状況を完全に理解し、私たちに耐える力を与えてくださいます。ですから恐れる必要は何もないのです。

みちしるべアーカイブ

清少納言が描いた光

小林　実

はじめに――清少納言と藤原定子

「枕草子」で知られる清少納言は、28歳の時、中宮・藤原定子（一条天皇の正妻）に仕える女房（使用人）として招聘されました。

清少納言にとって、才気溢れる定子との心情の交流がなされた宮廷は、籠から放たれた小鳥のような空間でした。しかし、それも束の間、その2年後には、絶大な権勢を誇った、定子の実父である関白、藤原道隆が薨去。それに呼応するように凋落する中関白家、その渦中、定子も産後の肥立ちが悪く、24歳の若さで早世してしまいます。

花火のように輝き、散った宮廷生活。「枕草子」で描かれている藤原定子には、不遇なはずなのに、なぜか華があり、矜持を保っているのです。それは清少納言が、定子の「足跡」ではなくて、彼女のうちの一瞬に輝く「光」を描いたからではないでしょうか。情景の色彩や宮廷内の空気、その一瞬の機微を、写実ではなく印象として捉えた清少納言の感性は、歌人の娘ならではの賜物かもしれません。

フランスの印象派画家の旗手クロード・モネは次のように語りました。

「印象を精確に描くためには対象を精確に描く必要はない。」

史的正確性に異を唱える向きもあるものの、視点を変えれば、清少納言は平安文壇に新風を巻き起こした印象派に相当すると言えます。

今回は、そのような枕草子の第一段、「春は曙」から、四季の中に描かれた光をとおして、聖書が伝えるイエス・キリストついて考察したいと思います。

一、春の光・紫だちたる雲

「春はあけぼの。・・・紫だちたる雲の細くたなびきたる。」

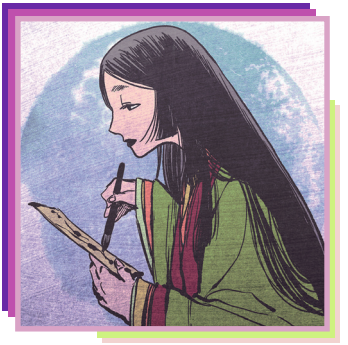
清少納言は、春を桜や鶯といった事物でなく、「刻」で捉えました。つまり一瞬のシャッターチャンスを逃さないカメラマン目線です。春の曙光は、紫雲の一瞬の輝きを映します。紫雲は吉兆を意味し、天皇家の象徴でもあります。

第一段は、すでに定子の没後に執筆した可能性もありますが、だからこそ、この紫雲に定子を重ねたのではないでしょうか。そして枕草子という「絵画」に収めたのです。その斬新さと、定子ゼミ代表という気概が感じられます。清少納言にとっては、定子こそが宮中の輝きであり、新芽を育む陽光、「枕草子」の筆脈を終段にまで導いた光でした。

しかし全人類を照らす「光」は、イエス・キリストです。この方はこう語られました。

「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」

（ヨハネの福音書8章12節）



二、夏の光・夜の月

「夏は夜。月のころはさらなり。」

漆黒の闇に浮かぶ月。この月の粋に清少納言は魅せられました。自らがではなく、太陽の光を受けて輝く立ち位置に、月の本分があります。清少納言、そして「枕草子」が放つ光は、ちょうど、月のそれです。発光源は、もちろん中宮・定子です。

清少納言は、出仕した当初から異彩を放った才女ではありませんでした。その蕾に眠っていた無限の才気を発掘したのは、11歳も年下の定子だったのです。定子は実兄から献上された大量の紙を清少納言に下賜します。当時、紙は高額であり、貴族といえども入手は困難でした。定子は、期待を込めてこれを清少納言に託しました。これが後に「枕草子」となったのです。

さて、私たちの多くは自らが輝くことができません。けれども、光であるキリストを知り、この方を救い主と信じることによって、心に光を受け、輝くことができるようになるのです。使徒パウロは、キリストを信じたクリスチャンたちに対して、このように書き記しました。

「あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあって光となりました。光の子どもとして歩みなさい。」（エペソ人への手紙5章8節）

三、秋の光・夕暮れ

「秋は夕暮れ。」

西の空を染める夕焼けほど美しいものはありません。しかし「斜陽」という語彙は、落日をも含蓄します。華麗な人生を送った人もやがて死の先へと旅立ちます。枕草子には綴られなかった「陰」の側面。いつか終焉が来る、という

不条理は、永遠への憧憬（どうけい）の裏返しではないでしょうか。

永遠への憧憬について聖書は次のように語っています。

「神はまた、人の心に永遠を与えられた。」（伝道者の書3章11節）

権勢を誇った関白・道隆も、華やかな定子ゼミも、現実的には洛陽（らくよう）であることを清少納言は知っていました。だからこそ枕草子というアルバムに、華美の極み、定子を永遠に閉じ込めようとしたのかもしれません。身体は墓石に下ろうとも、草子の中に千歳に輝く太陽として。

ただし清少納言のそうした永遠への憧憬に反して、聖書は、死後に神のさばきがあることについても語ります。（ヘブル人への手紙9章27節）希望のないものに期待を持たせることほど残酷な話はありません。しかし聖書は、さばきについて語ると同時に、永遠のいのちがあるという希望についても語っているのです。

「わたし（イエス・キリスト）はよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」（ヨハネの福音書11章25節）

四、冬の光・雪

「冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、」

川端康成の「雪国」の有名な冒頭で「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」とありますが、「トンネル」は現実と非現実をつなぐ扉と解すると、「枕草子」の場合、「非現実」を描出するのは、一面が雪で覆われた白銀の世界です。

清少納言は、この別世界に何を観たのでしょうか。定子を送る告別の式、それは雪が降り積もる日でした。ちょうど「枕草子」に描かれた定子自身の姿のように、雪が光沢を放っていたのです。でも、もしかすると、その輝きは雪のように何かを覆う蓋なのかも知れません。清少納言は何かを覆いたくて筆を滑ら

せていったと推察するのです。そうでなければ、中宮定子の史実としての悲劇と、枕草子における定子の輝きは調和しないからです。

聖書は語ります。

「たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。」（イザヤ書1章18節）

このように覆うべきは、「罪」だと言います。そしてその罪を覆うために、イエス・キリストは私たちの罪を背負って、十字架にかかり、死んでくださったのです。それは私たちに対する愛によることなのです。

「愛はすべての背きをおおう。」（箴言10章12節）

おわりに

清少納言にとって太陽のような存在であった定子は、一瞬の印象という意味において現実のものだったと言えますが、その輝きは永続するものでありませんでした。ですから定子に関しては普遍的な写実とはなりえませんでした。しかし、主イエス・キリストは一瞬どころか、永遠に消えることのない光です。

今、周囲を、そして世界を見渡しても暗いニュースがあふれています。そして私たちの航路を導いてくれるのは、枕草子ではなく「聖書」です。羊飼いからイスラエルの王となったダビデはこのように語りました。

「あなた（神）のみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」（詩篇119篇105節）

人間の書いた文学だけでなく、神のことばである聖書を、ぜひお読みいただくことをお勧めします。

（2021年9月号掲載）

著名人と聖書（第13回）

レフ・トルストイ（1828―1910）

―死の恐れとの戦い―

古賀敬太

ある中学生の投書

朝日新聞（2022年2月7日）の声の欄に、十三歳の女子中学生の投書が掲載されており、読んで釘付けになりました。このような若い少女でさえも、死の問題を真剣に考えていることに驚いたのです。一部抜粋します。「死んだら、どうなるんだろう。わたしはよく、そんなことを考える。天国や地獄という死後の世界が本当にあって、そこで存在し続けることができるのなら、そう願いたい。けれども、死によって私の意識も、心も、何ものかが永遠に消え失せてしまうとしたら、いま、これを書きながらも私は、底なし沼に沈んで行くような恐怖に襲われている。そして、『まだ私は若いから』と思考を中断するのだ。他の人はどうだろう。私が敏感なのかと思ったが、まわりの友人に聞いてみるとやはり、恐ろしくて考えるのをやめるという。この恐怖からどうやって逃げたらいいんだろう。大人になったら、怖くなくなるのだろうか。」

トルストイと死の問題

ドストエフスキーと双璧をなすロシアの文豪トルストイの生涯は死の恐怖と不安に苛まされた人生でした。彼の大作『戦争と平和』や『アンナ・カレニーナ』においての死の描写は際立っています。トルストイ自身が三歳の時に母を、九歳の時に父を、十歳

の時に祖母を、そして十三歳の時に後見人の叔母を亡くしています。特に母の死によって、彼は絶望を経験します。それ以来、彼は、死によってすべてのものがガタガタと音を立てて崩れていくという虚無感にとらわれます。

『アンナ・カレニーナ』では、トルストイの分身ともいえるアンナの夫レーヴィンが兄のまぢかな死に感じた心境を、「兄の姿と死の接近とは、レーヴィンの心にふと襲われたあの恐怖感をよみがえらせた。それは死というものの不可解さと同時にその接近や避けがたさに対する恐怖であった。」と描写しています。

トルストイにとって死を超えた希望がない限り、すべてのことが虚しく思えました。そのような虚無感が、彼の人生を蝕(むしば)みます。結婚して幸せな家庭生活を送っている時も、文豪として名声を博している時も、虚無感によって彼の心は苛まされます。

彼は五十歳の時に、新しい生涯を歩む思いで書き始めた自伝的著作『懺悔(ざんげ)』（１８７８－１８８２）においても、以下のように述べています。

「人生は無意味なものである。これが真理であった。まるであくせくと人生の道を歩いたあげく、深淵に達したもののようであった。そして私は、自分の前に、滅亡の他何ものもないことを発見したのである。しかも私は、止まることもできなければうしろに引き返すこともできず、また自分の行く手に苦悩と真の死のほか、つまり完全な絶望の他、何ものもないという事実を見ずにすむよう眼をおおうこともできなかった。」

トルストイの死の克服の道

では、トルストイはこの死の問題をどのように解決しようとしたのでしょうか。

彼は自分の過去の間違った生涯を悔い改め、神の命令にしたがって歩むなら、神に受け入れられ、死の恐れを乗り越えることができると考えました。彼は、「私はわが生活の唯一絶対の目的は、より良き人になることであるという自覚に、すなわち、神に対する、道徳的完成にたいする信仰に立ち返ったのである。」（『懺悔』）と告白しています。それは、

とりも直さず、聖書の「山上の垂訓」（マタイの福音書5～7章）と呼ばれる倫理を徹底して実践することでした。一言で言うと、「自分を愛するように隣人を愛する」という愛の実践です。トルストイにとって「山上の垂訓」は聖書の全てでした。

彼は自らのエゴイズムを克服し、他者を愛し、道徳的に生きるために、自分の土地や財産を農民に与え、慈善事業に尽力し、死刑制度に反対し、日露戦争に反対の運動をしました。その結果ロシアをはじめ、日本においても武者小路実篤といった白樺派の文豪など、多くのトルストイ信者を生み出しました。それで彼は誤ってキリスト教信者として理解されるようになりました。

しかしそこには、神の光に照らされて自らの罪を自覚して、神にひれ伏すトルストイの姿は見当たりません。また罪人のために十字架で血を流された救い主イエス・キリストに対する信仰を見出すことはできません。

そして彼の晩年は悲惨でした。妻ソフィアとの関係は破綻し、1910年10月に八二歳の高齢で家出し、駅で病気に倒れ、孤独のうちに死に飲みこまれてしまいます。

信仰義認と行為義認

一体トルストイのどこに問題があったのでしょうか？彼は真剣に生き、人生の生きがいを求め、死にうち勝つ道を必死で追求しました。

しかし、トルストイは自分の行いによって、神に近づき、神に受け入れられ、死に打ち勝とうとしました。それは、良い行いをすることによって、神に受け入れられようとする「行為義認」の道です。しかし聖書が語る救いは、まったく逆です。自分の罪を認め、私たちの罪を負って十字架にかかり復活されたイエス・キリストを信じることによって義とされる道です。聖書には、「すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖（あがな）いを通して、価なしに義と認められるからです。」

（ローマ人への手紙3章22～24節）とありますが、これが「信仰義認」の道です。義と認められるとは、罪が赦されるという意味です。

死に対する聖書のメッセージ

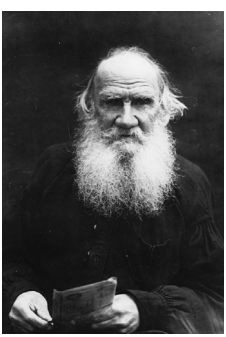
聖書はイエスを信じるすべての人に罪の赦しと死を超えた「永遠のいのち」を約束しています。（ヨハネの福音書3章16節・他）

イエス・キリストの十字架の犠牲によって、罪の問題が解決され、キリストが三日後に墓を打ち破ってよみがえられたことによって、死に対する勝利が与えられるからです。聖書に「『死は勝利に呑み込まれた。』『死よ、おまえのとげはどこにあるのか。』死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝します。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」（コリント人への手紙第一・15章54～57節）とある通りです。

そして聖書は、イエスが、肉体をとってこの地上にこられた目的を、「死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷として繋がれていた人々を解放するためでした。」（ヘブル人への手紙2章14、15節）と述べています。

私たちを罪と死の恐れから解放し、死を超えた永遠のいのちを与えること、これこそイエスがなされたことです。是非死の問題の解決がイエス・キリストにあることを知っていただきたいと思います。

【参考文献】
原久一郎訳「トルストイ『懺悔』」
（岩波文庫２０１３年）



みちしるべ７月号　第908号
令和6年7月1日（毎月１回１日）発行
発行所　伝道出版社
〒183-0056　東京都府中市寿町 2-8-9
TEL 042-366-7760
FAX 042-366-7790
編集人　伝道出版社　編集部
https://dendoshuppan.shop-pro.jp/
印刷所　株式会社　共同印刷所

昭和43年1月10日第3種郵便物認可
令和6年7月1日（毎月1回1日）発行
みちしるべ7月号　第908号
伝道出版社
〒183-0056 東京都府中市寿町2-8-9
定価1部 50円＋税　送料63円
振替00140-9-27336

Column

父親の思い

私には今月で２歳になる息子がいます。活発に動き回るので、よく転んでけがをします。大抵は、少し痛がるか、わずかな時間泣きますが、しばらくするとまた元気に動き回ります。そんな息子が転んで顔をぶつけ、口の中をけがしてしまい、激しく泣いたことがありました。大きなけがにはなりませんでしたが、ひどく泣く息子を見るのはとてもつらい経験でした。自分自身のことでなくても、自分の大切な人が苦しむのを見ることは、私たちにとって大変つらいことです。

イエスは十字架にかかったとき、「どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイの福音書 27 章 46 節・他）と父である神に叫びました。そのとき御子の苦しみの叫びを聞きながらも、神はその声に耳を閉ざされたのです。それはなぜでしょうか。その理由が次のみことばによって示されています。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」（ヨハネの福音書 3 章 16 節）

このように愛するひとり子を犠牲にしてまで、あなたを滅び（罪のさばき）から救おうとする神がおられるということを、ぜひお知りになってください。

（沖山祐喜）

なお、くわしく聖書について知るために、下記の所へぜひおいでください。